

論文の和文要旨	
論文題目	事象構造とスペイン語の受動表現
氏名	高垣敏博

本論文で扱おうとしているテーマはスペイン語の動詞が固有にもつと考えられる語彙アスペクト(lexical aspect, Aktionsart)である。世界の多くの言語において文が形成されるときに語彙アスペクトが関与すると考えられており、そのはたらきや構造を明らかにしようと考察されている。以下ではスペイン語の動詞(句)が備えている「語彙アスペクト」の特性を観察し、さらに語彙アスペクトを抽象化した構造として捉える「事象構造」(event structure)の視点からスペイン語の受動表現を中心とするいくつかの構文の形成過程を特徴づけることを目的とする。

まず1章「語彙アスペクトと事象構造—先行研究」ではこのような「語彙アスペクト」や「事象構造」研究の系譜を辿るとともに、これをスペイン語文法に取り入れ発展させている先行研究を概観した上で本論各章の議論に用いる枠組みを提示する。

語彙アスペクト研究は Vendler (1967) にさかのぼる。英語の動詞(句)の語彙アスペクトを統語・意味的に規定し、状態 (states)、活動 (activities)、達成 (accomplishments)、到達 (achievements) に 4 分類した。その後 Dowty (1979), Verkuyl (1989) や Pustejovsky (1991, 1995) などにより厳密化され、さらに抽象的な意味構造を探る試みが Pustejovsky (1991, 1995) の事象構造論として明示化されることになる。

スペイン語文法でも古くは Gili Gaya (1961) や Fernández Ramírez (1986) が語彙アスペクトに注目するが、De Miguel (1992), Fernández Lagunilla & De Miguel (2000), De Miguel (2000), Morimoto (1998), Marín (2000, 2004) などにより理論化が進められてきた。また事象構造については Fernández Lagunilla & De Miguel (2000) がスペイン語文法に導入を始め、Pustejovsky (1995) で提示された状態 (State)、過程 (Process)、移行 (Transition) の 3 構造を 8 分類に敷衍している。本論もそのようなアプローチの延長線上にある。

つぎの2章「スペイン語の受動文」では一般に3つに分類されるスペイン語の受動文のうち(1)の<ser 受動文>が中心的課題とするが、(2)の<se 受動文>と対比しながら扱う。(3a, b) の<estar 結果構文>と<estar 受動文>については5章で議論される。

- (1) Las noticias fueron divulgadas por los periódicos. <ser 受動文>
 the news (主語) was (<SER) spread by the newspapers¹
- (2) Aquí se venden periódicos. <se 受動文>
 here SE-buy(are sold) newspapers (主語)
- (3)a. La puerta está abierta. <estar 結果構文>
 the door (主語) is (<ESTAR) opened
- b. El edificio está rodeado por la policía. <estar 受動文>
 the building (主語) is (<ESTAR) surrounded by the police

ところでスペイン語の <ser 受動文> の特徴はその生産性の低さである。それが何に起因するのか、どのようなメカニズムで形成されるのかに常に関心が寄せられてきた。そのなかで De Miguel (1992)は「完了点をもつ事象が<ser 受動化>する」という完了性条件により説明した。すなわち(4a)の完了相動詞 *representar* 「上演する」から<ser 受動文>が作られるが、(4b,c)のように未完了相動詞の *buscar* 「探す」や *tener* 「持つ」からの形成は難しい。

- (4)a. La puerta fue abierta por Juan.
 the door was opened by Juan
- b. ??El libreto es buscado por Juan.
 the script is looked for by Juan
- c. *El libro fue conocido por Juan.
 the book was known by Juan

<ser 受動文>形成のもう一つの制限が<por 動作主句>である。(5)の完了相動詞 *heredar* 「相続する」による受動文では単数名詞 *mi madre* 「私の母」、複数名詞 *todos los hermanos* 「兄弟全員」のどちらも伴うが、(6)の未完了相動詞 *querer* 「愛する」や *buscar* 「探す」による場合は複数性(複数名詞・総称名詞)の *todos* 「全員」や *todo el mundo* 「みんな」、*la policía* 「警察」を伴うものの、単数形の *su abuela* 「彼の祖母」、*Juan* 「フアン」では非文になる。

- (5) La caja fuerte fue abierta por {mi hermano / los guardas} .
 the safe was opened by {my brother / the safe guards}
- (6)a. Juan fue querido por {*su abuela / todo el mundo / todos} .
 Juan was loved by {his grandmother / everybody / all}
- b. El secuestrado era buscado por {* Juan / todos / la policía}
 the kidnapped was searched for by {Juan / all / police}

このため本論では(7)の仮説を提案する。

- (7)a. <ser 受動文>は動詞が[+perfectividad]をもつこと。
 b. 完了相動詞ではつねに<ser 受動化>が可能。動作主は単数・複数のどちらでもよい。
 c. 未完了相動詞では完了事態の継起的連続(反復事象)を表すので受動化する。ただしその

¹以下必要に応じて繫辞動詞 *ser* の変化形には(<SER)、*estar* の変化形には(<ESTAR)を付す。過去時制では完了過去(点過去)はとくに注記しない。未完了過去(線過去)には IMP の記号を付けて区別する(注5を参照)。

反復性ゆえに動作主は複数姓名詞が要求される。

この仮説は完了性制約とともに未完了相動詞による<ser 受動文>が複数動作主を伴う制限を説明する。

ところが3章「スペイン語の<ser 受動文>—活動動詞をめぐって」ではいま見た(7c)の「por 動作主句の制限」への反例が提示されることになる。(8)で *conducir* 「運転する」、*cuidar* 「世話する」などの活動動詞（未完了相動詞）が用いられながら *un chófer* 「運転手」、*la enfermera* 「看護師」のように単数形名詞の *por* 動作主を伴うことができるからである。

(8)a. *El coche fue conducido por un chófer.*

the car was driven by a professional driver

b. *El niño era cuidado por la enfermera.*

the boy was looked after by the nurse

動作主は単数名詞ではあるが、一定の職能や社会的機能を担う「職業人」であること、さらにそのような動作主が典型的に行うと期待される行為を表す動詞と共起(*un chófer-conducir el coche; la enfermera-cuidar al niño*)することにより、動作主と動詞の間に「目的役割」(Pustejovsky 1995)という意味的適合性が成立すると考える。この主述の意味適合が文に一般性(総称性)、すなわち反復可能性を付与し、仮説(7c)の複数動作主の要請に合う効果を生むのではないかと考える。

さらに4章「スペイン語の<不定形 ser 受動文>」でも<ser 受動文>の本質が問われることになる。先行研究では動詞の「語彙アスペクト」と「時制アスペクト」の両要素を考慮することにより<ser 受動文>の形成が説明された。しかし「時制をもたない」はずの(9)のような<不定形 ser 受動文>が存在する事実により「<ser 受動文>の形成に関わるのは基本的に動詞の語彙アスペクトだけである」という主張に至ることになる。

(9) *Esta vida merece ser vivida felizmente por todos.*

this life is worthy (of) being lived happily by all

そこで<ser 受動文>の形成が動詞の不定形と定形と2つのレベルで起こると仮定してみると、仮説(7)は不定形レベルの<ser 受動文>形成に適用されるということになる。それに対し定形レベルの<ser 受動文>には時制が課される。このような「定形に課された制限」に加えその他の統語・意味的制限を探す試みをする。1)母語話者への調査で「*por* 動作主句」についての仮説(7b,c)が定形レベルでは予測どおりの結果にならないこと、2)受動化過程における目的語の昇格が、不定形では主節からのコントロールで形式的に決まるのに対し、定形では「主題化」のような談話的制限が関わるためにより不透明であること、3)昇格目的語の意味が不定形に比べ定形では「外的」で「自立的」である必要があり、より制限されていること、などが示される。

つぎの5章「<estar+過去分詞>構文」では(3a,b)で見た<estar 結果構文>と<estar 受動文>を中心にその形成過程を分析した。受動文と認められない前者については達成動詞(移行事象)を基盤とする分析を行うが、(10a)のような到達動詞や(10b)の作成動詞による特

殊な形成についても言及する。

(10)a. El tesoro ya está encontrado.

the treasure already is(< ESTAR) found

b. Este cuadro está pintado en la pared por Leonardo.

this picture is (< ESTAR) painted on the wall by Leonardo

(3b)の <estar 受動文> は動態的な能動文に対応し、por 動作主句を義務的に伴うことを観察した上で、この受動文に用いられるのは「関係概念動詞」と呼ぶ述語に限られることを主張する。主語と目的語が相互に意味を規定し合い、ともに不可欠な関係を構成する述語で、他にも(11)の3下位類があると論じる。

(11)a. Las alergias están provocadas por el polen.

<因果関係>

(the) allergies are caused by (the) pollen

b. El país está dominado por una política abusiva.

<支配関係>

the countries are dominated by an abusive policy

d. Esta sociedad deportiva está formada por jóvenes.

<構成関係>

this sports club is formed by young people.

以下の2つの章は本論のタイトルにある「受動文」そのものが対象ではなく、受動表現の延長線上にある周辺の現象ということになる。どちらも広義の「ボイス」(voice)に関わり、また事象構造がスペイン語の文法構造に影響を及ぼすあり方を観察するという本論の主旨に適うテーマであると考えられる。

6章「形容詞的過去分詞」では自動詞から作られる過去分詞が対象である。一般的には(12)(13)のように他動詞由来の過去分詞が扱われる。

(12)a. La puerta fue *abierto* por el portero.

<ser 受動文>

the door was(< SER) opened by the doorkeeper

b. La puerta está *abierto*.

<estar 結果構文>

the door is(< ESTAR) open(ed)

(13) la puerta *abierto*

<形容詞的過去分詞>

the open(ed) door

しかしここでは(14a)や(14b)に見られるような自動詞から形成される過去分詞に焦点を当てる。

(14)a. las hojas *caídas* / el gato *muerto*

<形容詞的過去分詞>

the fallen leaves the dead cat

b. Las hojas están *caídas*. / El gato está *muerto*.

<estar 結果構文>

the leaves are (< ESTAR) fallen the cat is (< ESTAR) dead

対象になるのは ir(se)「行く」、salir(se)「出る」、pasar(se)「移る」、venir(se)「来る」、entrar(se)「入る」、caer(se)「落ちる」、subir(se)「上がる」、bajar(se)「下りる」の8つの「移動の

非対格自動詞」(および瞬時動詞の morir(se)「死ぬ」と aparecer(se)「現れる」)でどれも起点と着点の間を移動する移行事象をもつと考えられる。

(14a)のような名詞修飾の場合は、完了事態が移動の「起点」で起こる(15a)の irse と「着点」で起こる(15b)の caerse のような対立が見られる。

(15)a. tiempos idos 「過ぎ去った時」(<irse)

b. hojas caídas 「地面に落ちた葉」(<caerse)

一方、<estar 結果構文>形成については、大半が(16a)のように容認されず、(16b)の caer(se)とともに subir(se), bajar(se)の3動詞においてのみ容認されることが明らかになる。

(16)a. *Los tiempos están idos 「時代は過ぎ去っている」

b. La hojas están caídas 「葉は落ちている」

最終の7章「非対格自動詞と<se le V>構文」でも前章と同じ移動の非対格自動詞が「ニュアンスを変える se (se de matización)」を伴う再帰形で用いられ、そこに与格人称代名詞 le で表わされる参加者が介入する(17)(18)のような<se le V>構文が研究対象となる。

(17)a. El avión se nos ha ido ya.

the plane SE-us-has gone away already

b. Mi niño se me subió a un árbol y allí estuvo subido más de dos horas.

my boy SE-me-went up to a tree and stayed up there more than two hours

(18) Se le vino la hija a la ciudad.

SE-him came the daughter to the city

参加者が移動の極点である「起点」「着点」、あるいはその両方に立つと仮定し、その定位のしくみを調べる。(17a,b)の irse や subirse では参加者が起点に立ち、飛行機や息子がその位置から離脱していくが、反対に(18)の例では le で表わされる人物(例えば父)は娘が向かう着点の la ciudad に在住していると考えられるのである。さらに空間・時間的移動からの拡張的用法として morir (se) と aparecer(se)など「概念的な移動」についても考察する。

このように本論の各章で扱うテーマはすべて動詞固有の「語彙アスペクト」および「事象構造」を出発点として、それが受動表現および2つの関連現象の中にどのように反映されるのかを観察することが主眼である。したがって各章で述べる文法現象の核になる部分はそれぞれ語彙アスペクトや事象構造への言及を抜きにしては論じられないことがわかるはずである。Pustejovsky (1991:48)は "grammatical phenomena do in fact make reference to the internal structure of events" と述べているが、スペイン語文法でもこの主張の妥当性が明らかになっていくものと考えられる。